九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ヘーゲル論理学の始元論

姜，尚暉

https://doi.org/10.15017/1397676

出版情報：哲学論文集. 17, pp.117-121, 1981-09-20. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

発表要旨

ヘーゲル論理学の始元論

姜　尚　暉

ヘーゲル論理学の始元論は、その内容を整理し補綴していえば、次の如きものである。

一、始元の本性

(1) 学の始元は、絶対知が提示する絶対的な学的原理でなければならない。

(2) 学の始元は、学の全内容がそれから開示されねばならぬものであるから、それは絶対的に具体的なものでなければならない。

(3) 学の始元は、しかしそれはまだ始元にすぎぬ故に、なお何らのものも含んでいない単純な抽象者でなければならない。

始元が単に端初ではなく、真に事態そのもののアルケーとしての始元である限り、かかる始元への要求は、至極当然のことでなければならない。が、かかる相矛盾する諸本性をもつ学の始元は、それではどのようにして得られるか。

二、始元の形成過程

学の始元は、絶対知によって提示される学の原理でなければならぬ。が、それではその言うところの絶対知とは、どういう知であるか。ヘーゲルによれば、絶対知とは、知るものと知られるものとの二者が、互に対者を自分と純粋に同一のものとして認識する知であるという。が、それではそのような絶対知は、どのようにして得られるか。

絶対知は単なる相対知——主客の両者が互に異なるものとしてある知——ではない。だからそれはいきなり無造作に獲得し得る知ではない。ではなくて、それは却って我々のもつ一切の相対知の逐一の吟味を通じて、その行程の究極において、終極的に把握され得る知である。すなわち、ヘーゲルは論理学に先行する精神現象学において、かかる絶対知を精力的に追求したのである。——絶対知とは相対知と対立する知である。ところで、それでは相対知とは、一層くわしくはどういう知であるか。

ヘーゲルは、相対知を単に我々の意識において成立する知であるとし——というのも、意識において成立する知は、悉くが意識するものと意識されるものとの相異の結果、その知はその知の吟味において、絶えず別の意識知へと転換せられるからである——周知のように精神現象学において、この知の詳細な遍歴過程、挫折による自己転換を追究しているのである。意識とは、ヘーゲルにおいては、意識されているものを、一方では自分と区別するとともに、他方ではそのものと関係して存するものである。だから、意識はかかる限り、広義においては、理性や精神をも含んでいるものである。というのも、意識がたとえ意識自身を自己意識する理性・精神の立場に立つ場合といえども、それらはそれらがなお自分の対者を単に自分と異なるものとのみ見る限り、かかる理性や精神は、なおやはりそれらのものの素朴な意識の立場を脱してはいないからである。そこで精神現象学での意識知の遍歴は、意識の全範囲として、「意識—自己意識—理性—精神—宗教」という諸域を歩み、そうしてその各層での対象との関係に応じて、「主観と客観—自己と他者—即自と対他—個別と普遍」という相互の対応関係を採るのである。とはいえ、この意識知の弁証法的展開——したがって完全に遺漏なき進展——は、究極においては止揚される。というのは、自己の遭遇する諸々の意識対象を、ただ自分と区別される他者とのみ観る意識は、遂にその究極において、自己と全く同一のものであり、むしろそのものの自己限定として自己が存する、自分との純粋に同一である対象を見出すからである。すなわち相対知は絶対知へと止揚されるのである。或いはさらに内容的にいえば、自分の遍歴した諸々の相対知を自己の中に溶解して、その究極において、自己との純粋に同一な普遍者と合一した知——それ故に、かかる知はもはや単なる意識知ではな

く、まさに学の始元・原理をなすものとしての純粋知・概念知である――へと高められるのである。

三、始元の発現

絶対知は、絶対学の始元を提示するものである。いいかえれば、絶対知がその本性を自己開示するとき、それはそのまま絶対学の原理―アルケー―となるのである。絶対知は右にもいうように、すでに自分の中に自己に到達するまでの一切の相対知――相対的真理――をふくみ（それ故に絶対知は、絶対的に具体的なものである）、同時に他方また、それはそれ自身の成立とともに、それらの一切の相対知を自己の中に止揚し解消して、自己自身ただ単純に絶対知としてあるもの（それだから絶対知はもはや全く単純な抽象者としてあるもの）である。だから絶対知は、含蓄的にはすでに学の始元そのものをなしている。すなわちこれを逆にいえば、学の始元とは、絶対知のまさにかかる蔽われた本性を、元来の本性へと顕在化することによって、自ずと現われるものである。――つまりかようにして、学の始元は端初としては、先ずはただ純粋にあるもの――純粋有――としてあるものである。

四、始元の展開

学の始元は、単に空虚な、無内容な始元としてあるものではない。ではなくて、それは同時に自己の中に諸々の相対的真理態を止揚して発現しているものである。だからかかる始元の展開は、もはやただ学の単に空疎な端初としてあるものの展開ではない。そうではなくて、それはすでに学の原理となったものの展開として、そのものの逐次的展開は、そのままその原理に拠って形成される現実的形態の逐一の展開となる。学の原理は、精神現象学での諸々の典型的な真理形態の止揚によって生じた絶対知の飜転によって、自己成立した絶対的原理である。したがってかかる一切の成立根拠を自己のうちにふくむ具体的な原理の展開は、必然的にその原理によって措定される現実的事態の具体的な定立、存在への開示とならざる得ない。すなわち原理の一転々々の開展が、そのままその原理の具体的現実態の実在化となるのである。そこで、このことをこの現実的世界の全体の面でいえば、我々に現前するこの現実的世界は、悉くこの絶対的原理の、それ自身の必然的な――弁証法的な――概念展開の体系態、いいかえれば、この原理の採る個々の進展形態である絶

対的概念の体系界としてあるものである。すなわち、世界はすでに絶対者自身の自己開展によって、体系づけられた世界、のみならず、その展開の完成によって、完結された世界としてあるものである。絶対者は、まず始めは、単に論理形態としての領域（論理学）を、しかし次には飜転して、その論理的形態の他在としての自然的世界（自然哲学）を、そして最後には、両者の統一としての精神的世界（精神哲学）を歩み、かくしてこの最後の真に自己自身の実現された——顕在化した——精神的世界の形成において、その展開を完了するものである。或いは一層立入っていえば、単に抽象的な絶対的論理概念として出発したにすぎなかった絶対者は、次には転じて自然的世界の形成を経、そして最後にはこの精神的世界の完成において、自己自身の真に充全に開示された存在としての精神的——人間的——存在を得るのである。

——精神現象学とは、この完成された精神的存在としての立場の中で、なおまだ自己の絶対的本性に気付いていない、単なる意識としての精神が、真に精神としての精神に邂逅するまでの、長い自意識世界の遍歴の記録である。それで精神現象学は、かかる意識の世界の遍歴行程である故に、それは学の前後において二度現われる。すなわち、一度は体系の外部（つまり単なる意識の学としての立場）において。他は、体系の内部（すなわち精神自身の展開が、まさに意識の段階に到達した〔エンチュクロペディー「第三篇精神哲学」中の〕立場）において。だがすでに明らかにされたように、この二つの立場は、根本的に次元の異なるものである。すなわち、前者は単に絶対学に到るまでの、学の予備学にすぎないものとしてのそれであり、後者はまさに絶対者自身の自己展開の途次において現出されたものである。

五、始元・展開の特異性

学の始元とその展開とについては、以上に述べられた通りである。そこで始元の展開が、以上のように始元の自己実現的完結性・体系性である為に、始元とその展開とにおいては、次のような特異性が挙げられる。

(1) 始元の特異性

抽象的と具体的。直接的と媒介的。

冒頭にも触れられた始元のもつ、これらの矛盾的性格は、しかし以上に述べられた始元の本性の解明によって、概ね理解されたであ

ろう。すなわち、始元はそれに到るまでの精神現象学における諸々の相対知の止揚的全体者という面から見れば、まさに具体的なもの、媒介されたものであるが、しかしそれが同時に、それらの相対知の純粋な止揚者、自己への透明な解消・無化によって存する始元としては、全くの純粋な抽象者、それ故に全くの単純な直接者であるということである。

(2) 展開の特異性

前進は後退。後退は前進。

始元の展開は円環性をもつ。すなわち始元の展開は――元来始元自身が、以上にいうように自己実現的な完結者であるために――その運動においては、前進即後退であり、後退即前進であるという性格をもつ。すなわち始元の前進は、始元の完成態から見れば、自己のまだ単に抽象的な存在態から、自己の真の具体的完成態への後退であり、それ故に逆にはまた、始元のかかる具体的完成態から見れば、自己のこの完成態への後退は、そのまま自分の単なる純粋抽象態から、本来の完成された自己への前進であるということである。――学の出発点においては、単にまだ前提であるにすぎなかった始元が、しかし単に前提・仮定ではなく、却って必然的な基礎をもつ前提であったという証明は、正にこの運動の円環性に拠るものである。

終りに

この発表は、ヘーゲル論理学の始元論の整理であり、併せてまた精神現象学のもつ周知の二重の性格――予備学か、体系学か――への全く別の象面からの合理的解明を意図してなされたものである。

（昭和二十九年本学文学部（旧制）卒・西洋哲学）